

古代經濟史に於ける商工經營の問題

室 谷 賢 治 郎

—

中世及び近世の經濟史に於ける中心問題は合理的な經營の發展を繞るものである。その例證を擧ぐれば、現に資本主義の概念を規定するに當り多くの學者はこれを資本主義以前の時代に存在した資本に基かしめるよりも、寧ろ資本計算の合理性に認めんとしてゐるのである。ゾムバルト¹⁾、ツキーデネック・ジューデンホルスト²⁾、ジーヴェキング³⁾等の所説に顧みて這般の消息を知るべきである。

然るに古代經濟史にあつては經營の問題は殆ど提起せられることなくして今日に至つてゐる状態である。これは大なる缺陷であつて、その充實は極めて重要であると謂はねばならぬ。蓋し吾等はこの領域にこそ古代の經濟と中世・近世の經濟との發展段階を相互に比較すべき一個の可能性を見出すからである。即ち古代經濟史の研究並びに文化連續性の研究の進歩により、中世の發展が古代の發展に對して犯してゐた誤謬の如何に大で

- 1) W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. I. Bd. München und Leipzig 1928. S. 319.
- 2) Zwiedeneck-Südenhorst, Kapital und Kapitalismus. Schmollers Jahrbuch 54. Jahrg. 1930. S. 1091.
- 3) H. Sieveking, Wirtschaftsgeschichte. Berlin 1935. S. V.

あつたか、また民族移動のために希臘・羅馬に於ける商工業の進歩の阻害せられることが如何に少かつたかが漸く明かにせられて來たのである。詳言すれば古代經濟史に關する新研究は嘗てペロップス⁵⁾やエドワード・マイヤー⁶⁾の採つたやうな「現代化」の態度と異り、古代の經濟組織と中世前期の經濟組織との間の所謂停頓を解消すると同時に中世研究の上に從來の「原始化」的取扱を排し獨自の結果を促進せしめることとなつた。而も古代經濟史と中世經濟史とを共通の體系に導かんとする要求は益々高まりつつある。かくて一方中世を正しく價值判斷すると共に、他方古代それ自らのためにも古代の到達した組織が近世の發展階梯に於ける如何なる地位を占めるかを見定めることが切實な課題とならざるを得ぬ。右のエドワード・マイヤーがヘレニズムの世界經濟を論じてこれを第十七世紀及び第十八世紀のそれと同列に置いてゐる⁷⁾が如きは、課題の一斑を示すものと謂つて宜い。この點につき偶々芬蘭の學者グンナー・ミックウィッチの一論文⁸⁾は頗る示唆に富むものとして看過すべからざる好文字である。余は嘗て古代希臘經濟史に關しビュヒアーの經濟發展段階學說に顧みて一文を草したことがある⁹⁾。以下ミックウィッチの如き豊富な史料を有たざることを嘆じつつ前文の補論を試みよう。

二

古代に於て最も重要な營業部門が農業であつたことは改めて謂ふまでもない。また農業が社會の上流階級の利害と密接な關係があつたことも明白である。随つて農業經營の高度に發展する社會的條件は既に存在してゐ

- 5) J. Beloch, Griechische Geschichte. Strasburg 1885.
- 6) Eduard Meyer, Kleine Schriften. Halle 1924.
- 7) Ed. Meyer, S. 141.
- 8) Gunner Mickwitz, Zum Problem der Betriebsführung in der antiken Wirtschaft. Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte. 32. Bd. Heft 1.
- 9) 拙稿「ビュヒアーの經濟發展段階學說と古代希臘經濟史」小樽高商創立廿周年記念論文集

たのである。唯だ實行は今日より見て遙かに後れてゐた。換言すれば技術の點に於ては組織立つた經驗を有しなかつたし、經濟的計畫の條件も適當な簿記を知らなかつた。即ち農業簿記は専ら個人的管理を目的とし、投下資本の管理を企圖するものでなかつた。それは恰も官廳簿記の如く記入せられ、收益計算を行ふものでなかつた。それ故に種々の果實、家禽飼育等の選擇も計算の上から謂つて基準のある道理は無かつた。希臘・羅馬時代の農業は營利化せられてゐたと謂はれるけれども、實はその經營たる決して計算的でなかつたことを知るべきである。

農業に關する文献の比較的豊富なのに比べると商業に就ての資料は甚だ乏しい。これが抑も問題を晦澁ならしめる所以であるが、併しまた茲にこそ卓抜した歴史的解釋の要請せられる餘地が残されるのである。前記のミックウィッチの如きは古代に於ける商業經營の記録を古代の資料そのものから仰がずに、ハンザ商業との平行關係を研究して獲る類推から求めようとする新解釋を提唱するのである。固より從來の研究者の中には意識的に又は無意識的に古代と中世・近世との平行を指摘する者が無かつたのではない。例へばハーゼブレークの如きはその最も典型的な學者で、ハーゼブレークはビエヒアー、ゾムバルト、ラオン・ペロウ等の勞作を批判しつつ独自の見解を披瀝するところがあつた。¹⁰⁾

併し茲では姑くミックウィッチの所説を辿つて見る。彼に従へば商業經營の指揮に於て重要な問題の中第一位を占めるものは商人の定住に關する。詳言すれば如何なる計算でもその精粗は商人に齎される通信の回數及

10) Johannes Haselbroek, Staat und Handel im alten Griechenland. Tübingen 1928. 尚ほ前掲拙稿參照。

び更新によるものである。随つて今日の如き電信電話の發明せられる以前にあつては、旅商に通信の届けらるべき術も無く、旅商は旅先で自ら直接に見聞して蒐める報告に憑る他はない。勢ひ右の如き状態の下にあつては商人の決斷は傳統によつて定められるか、全く不確實な投機によつて左右せられざるを得ぬ。この種の商人は第十六世紀に於ては和蘭の海上商人によつて代表せられるところで、和蘭商人はバルチック海沿岸諸都市と西印度諸島との間の船主の計算に對し鹽及び穀物を積んで帆走したのである。かゝる商業は甚だ大膽なもので非常な危険と利益との緊張によつてのみ可能であつたと謂つて宜い。

さてハーゼブレークの如き研究者はこの種の商業が紀元前四世紀に盛に行はれたと主張する。即ち商人は概ねその商品を自身で運搬し、多くの場合出發に及んでも尙ほその商品を何處で賣却すべきかを皆目知ることなく、海上商人は自己資本を所有せぬのが普通であつたと説くのである。¹¹⁾然るにこの説には誇張の嫌があると論駁を加へた者がある。例へば凡そ無資本の商業は不可能で史實に照しても見當らぬところであるし、ハーゼブレークの取扱ふ資料は一面的であるとの指摘が見られる。¹²⁾尙ほ右の消極的方面の外にハーゼブレークが自ら意識しながら十分に辯護しなかつたところの第二の問題がある。¹³⁾それは資料が殆ど全く穀物の取引に限られてゐるが、穀物の取引と他の商業部門との間には見逃すべからざる根本的な相違が存することである。蓋し穀物の價格變動は他の商品の場合よりも遙かに大であつたからである。¹⁴⁾その原因は謂ふまでもなく穀物の收穫が豊凶不定であるに拘らずこれに對する需要或は消費には殆ど弾力性が無い點にある。いまハンザ商人の穀物取引を

11) Hasebroek, S. 84 ff.

12) W. Otto, Kulturgeschichte des Altertums. München 1925, S. 77.

13) Hasebroek, S. 100.

14) Fr. Heichelheim, Wirtschaftliche Schwankungen der Zeit von Alexander bis Augustus. Jena 1930. S. 111 ff.

見るに上述の如く特殊の組織があり、商人は穀價の低い所に赴いて求め、これを穀價の高い所へ賣した。然るに價格變動の頻繁な場合には遠方から穀物の積込を處理することは到底出来ぬ。仍て荷主は片時も商品の側を離れ得ずに遭逢する可能性に對處せねばならぬ。但しこれは穀物取引に限つてのことであることを注意する必要がある。何となれば他の商品では事情が全然異なるからである。それ故和蘭の穀物船によつてハンザ商人の取引を判斷すべきものでなく、同時に遠隔の地方へ赴いて取引した穀物商人によつて古典希臘の商人を判斷すべきものでもないのである。

かくて穀物の取引よりも高次の發達を示したところの商業の形式を繹ねるに、商人がその住所から離れて業務を営み得た方法の出現が注目されるのである。この場合解決を要した問題は外部の代理による距離克服である。換言すれば書面による註文の發送が一般に書面による取引の締結と同様に不可能であつたから、取引を欲する者は代理人を有たねばならなかつた。このことは法律上は各種の方法で成就せられたけれども、經濟上は巡回する代理人を派遣するか地區の定住者と協働するか何れかを撰ぶ必要があつた。

先づ第一法に關する例は少くない。船舶の派遣に就て說かれてゐる場合は凡てこれであると謂つても差支ない。數隻の船を所有した銀行家パシオン、アドリアチック海へ船を送つたディオゲイトン、奴隸のラムピスをボスポロスに遣したディオオン等の名を擧げるだけで十分であらう。¹⁵⁾ 然るに船主を派遣すると共に商業使用人を出張せしめ得ることも容易に想像されるところである。その例としてはボスポロスに奴隸を越年させた穀物商

15) 詳しくは Ziebarth, Beiträge zur Geschichte des Seeraubs und Seehandels. Hamburg 1929. 參照

クリジツボスを想ひ合ふことが出来る。¹⁶⁾

次に地區の定住者との協働に就ては後述のクレオメネスの場合を除き僅かに一の例より見當らぬ。併しパシオンの多くの同業者を今日の會社員の如く取扱ふとせば尙ほ幾多を拾ふに足るのである。

然るにハーゼブレークは右の如き外部の代理による商業の可能性を否定してゐる。その根據とするところは何かといへば、私的驛遞、運送業務、手形及び簿記の缺如である。先づ簿記に就てはハーゼブレークは資料として入手し得るものの無いことを指摘する。次に私的驛遞と手形とに關してはハンザの代理商がこれ等を用ひずに業務を遂行したことを援用する。更に運送業務の如きは希臘に於て見られる以上のものが無かつたと主張するのである。

併しながら希臘人が紀元前四世紀に到達した商業の發展段階を測定せんがためには國外へ出張した穀物商を拉し來るべきでなく、寧ろ一箇の櫛製作所と若干の船舶とを有し尙ほ到る處に知友を持つてゐたところの銀行家パシオンを採るべきであるとするのがミックウィッチの見解である。パシオンはイソクラテスやデモステネスの法廷辯論によればアルケストラトスの後を承けフォルミオンに傳へた銀行經營者であつたが、單に銀行業務のみならず冒險貸借の如き商業活動を營んだ。即ちパシオンは利子を徴しての貸金、當座預金、信用狀の發行等の如き金融的性質を帯びる活動を爲すと同時に商業取引を扶けること少からず、紀元前四世紀頃のアテネ否希臘全般の經濟生活に大なる刺戟を與へたのである。¹⁷⁾彼の有した大資本は六〇タレント（一萬四千磅）で、内

16) Ziebarth, Eine Handelsrede an der Zeit des Demosthenes. Heidelberg 1936. S. VI. 17.

17) Jules Toutoin, The Economic Life of the Ancient World. London 1930. p. 76.

二〇タレントは不動産、四〇タレントは債券として保持せられた。而して前者に對しては八%、後者に對しては一二%の利率を収めてから、彼は約四萬ドラクマの所得を擧げることが出來た。紀元前三九四年以降ペシオンは凡ゆる市場と莫大な商業を爲したが、特にビザンチオン及びオイタシンとの取引は顯著であつた。三七三年彼は健康を害して事業から引退するの已むなきに至つたけれども、尙ほ商會としては五〇タレント（二萬一千六百四十磅）の資本を有し、その中三九タレントが彼自身の財産であつたといはれる。¹⁸⁾ 随つて彼の營んだ商業を原料購入と楯の賣却に限らんとするペーゼブレイクの想定は、自ら論駁せられざるを得ぬのである。當時はかかる特化はペーゼブレイク自身言ふ通り殆ど不可能であつた。何となれば當時は國際的な支拂機關が無かつたからである。原料を買ふため、また利益無しに航海することのないやうにペシオンの船主は一定地點で需要せられた商品を運搬せねばならず、同時に楯を賣つた代金を商品に振當てねばならなかつたと見るのが寧ろ妥當である。パシオンは銀行業務の活動と相並んで多方面の商業を營まねばならなかつたことは上に言した通りであるが、然りとせば楯の製作品の如きは最も重要なものと謂へぬであらう。かくて彼がまた海外の知友に代理の任務を竭さしめることを怠らなかつた點も容易に理解し得るのである。何となれば楯の販賣は専ら船主に委ねられ、船主は或る地點に到着すれば限定された時間内に販賣を行ひ、その後の小賣のための店舗を開設し得なかつたからである。唯ださればとてパシオンの活動を以て中世のペルツチ家やフッガー家と同日に談すべからざるは謂ふまでもない。

18) Gustave Glotz, *Ancient Greece at Work: An Economic History of Greece from the Homeric Period to the Roman Conquest*. London 1926. p. 305.

19) Hasebroek, S. 5, 13 f. *Antike Wirtschaftsgeschichte*. Leipzig 1926. p. 13.

かかる觀點からするときには右のパシオンから穀物獨占商クレオメネスへの發展は決して異とすべきものでない。クレオメネスは亞歷山大王の下に埃及に於ける行政的地位(メムフィスの長官)を與へられ、同時に穀物の大輸出家となつた者である。茲に於てかハルゼブレトクが見るやうな古典時代の經濟組織とヘレニズム時代の經濟組織との間に於ける大停頓は、古典時代の側から觀察するときには殆ど消失することになるのである。²⁰⁾

然らばヘレニズム羅馬時代の經營との關係如何。これに關しては從來對立的な誤謬を犯し、餘りに高い發展の程度を與へたのではあるまいかといふ疑問が生ずる。事實必要な資料に基いて判斷するときには或る程度までこの疑問が當つてゐるやうに見えるのである。左にヘレニズム前期に於けるクレオメネスの穀物取引とアポロニオスの業務とを史實に採つて検討を加へよう。

クレオメネスの計畫した穀物買占は三三〇年頃行はれた。當時一般に希臘には凶作があり、その反對に埃及に於ける收穫は豊かであつた。偶々メムフィスの長官であつたクレオメネスは埃及からの輸出を禁止したため埃及では穀物の價格が急降し國外では騰貴することとなつた。即ち埃及の農民が納屋を満してゐる間、アテネ大はメデイムヌスにつき三二ドラクマ(アッシェルにつき一七志六片)を支拂ひつつある状態であつた。仍てクレオメネスは埃及の收穫を全部買占めたが、暴落により供給を餘り少くするやうな誘惑にかゝらぬことに留意した。換言すれば彼は相應の價格を付け、購入の絶對的獨占を得るやうにした。同時に彼は大規模の輸出を計畫し、凡ゆる港に報告並びに販賣のための代理商を置いて通信に遺憾なからしめた。かくて彼は需要及び變動の報告

を受けつつ價格の最も有利な市場に遲滞なく財貨を送附し得たのである。²¹⁾

右の如くであるからクレオメネスの代理商の或者は例へばロードスやピレウスの如き希臘の都市に定住し、或者はアレキサンドリヤに定住し、更に或者は穀物を積込んで埃及から出航した。而してこれ等の代理商は相互に市況を交換し、價格の最高の地に船を差向けたが、かゝる組織をアテネ人は生計の調整上特に好感を以て迎へるやうなことはなかつた。蓋しこの組織はアテネの利益を奪ふこととも關聯したからである。何れにせよ茲に問題となるのは代理商兼協働者が如何なる關係に於て中心に立つたかといふことである。

この點右の組織の内容は頗る緩かなものであつたらしく、伊太利及び南獨逸に於ける前期資本主義の大商人の代理商に常例であつたところの主人との競争はクレオメネスの場合には見當らぬ。ディオニソドロス及びパルメニスコスの二人の船主がクレオメネスの仕事を助けたにもせよ、彼等は有利な機會の現はれた時に自己の計算に於てアテネで貨幣を借り、その代りアレキサンドリアからの穀物を供給したのである。この場合彼等はアテネへ穀物を持來ることを約束したが、これはクレオメネスの變動に應ずる制度とは一致せぬものである。他方クレオメネスは財貨購入のためには如何なる人たるに拘らずこれを派遣し、唯だ誤つた計算を斥けることを己れの任務とし、隨つて派遣者が餘りに高い價格を支拂つて不適當なことを爲した時は不満を洩したと傳へられる。要するに紀元前三百年頃の代理商にあつては誠實の點に關する正當な管理手段の無かつたことが知らしめられるのである。

21) Glotz, p. 364.

次にアポロニオスに就ては知られる所は甚だ少い。彼自身又は近隣の者が輸入業を営み、三隻の船に一千メトレテの油を輸入したといはれるが、どの程度まで彼の同僚がシリアに於て商業を営んだか、彼と同僚との關係如何等は全く不明である。ツェノンの弟がロードスで代理商を営んだといふ例もこれに屬する。

更に眼を轉じて伊太利に至つても事情は毫も異るところがない。即ち同僚の一人が故郷に殘留し、いま一人が外部の代理を引受けるところの會社が見られるのである。キケロの時代にその社員をシシリ島に派したプテオリの商人は明かに右の型に屬するもので、同時に伊太利に於ける東洋植民地の同僚はその地位に於て右のロードスのツェノンと似たものと謂つて差支ない。²²⁾

羅馬時代に於てパシオン及びアポロニオスと對偶をなすと見られるのはラビリウス・ポスツムスである。ポスツムスは商業で産をなした騎士の息で、收税人の會社の株を多數に所有した。彼は幾多の屬州に於ける都市に金を貸付け、特に埃及王プトレミー・アウレテスに對しても金融を與へた。埃及王は夙に臣民から逐はれ、王位回復のため金を要したのである。ポスツムスは當時埃及の財務管理をしてゐて、關稅及び獨占を管掌することが出來た。而して彼はプテオリに全艦隊を派遣し、パピルス、布、硝子器等埃及の財貨を積込ませたが、この冒險は殆ど失敗に歸し、却つて彼はプトレミーのため獄に投ぜられた。併しながらポスツムスは幸に逃亡することが出來、伊太利に安着した。後に至り彼はシーザーの代官となり、財産を回復する機會を得たのである。²³⁾ 即ちポスツムスは知人を富ましたり、業務に派遣したり、持分を與へたりすることを決して忘れなかつた。

22) Tenny Frank, An Economic History of Rome. 2nd ed. Baltimore 1927. p. 313.

23) Toutain, p. 249.

と謂つて宜い。彼の組織は事實上クレオメネスのそれと全く同一であつたやうに見えるのである。右の如き方法は後の時代まで維持され、紀元後五百年の頃にも地方に於て商人は他人計算の商業を不可能でない²⁴⁾と考へた。而しその後百年アレキサンドリアの商人は、その弟と息とを船でアフリカへ派したことがあり、また紀元後三三五年頃デムラの商人ネブケロスが略ぼ同様の方法を採つたといはれる。併しながら茲に看過すべからざる一進歩が或る點に現はれた。それは羅馬人によつて共通の貨幣本位制が確立せられて以來、戻り荷を強制することが無くなつたことである。この點デナールの本位制は中世の手形と同一の意義を有することとなり、羅馬時代には何故に現金の伴はぬ交易が少かつたかを知るに足るのである。かくて一方的或は片務的の商業が可能となり、人々は賣上代金を家へ持歸ることを許されるに至つた。然るに一方的の商業の可能性が開けると共に遠隔地の商人即ち小賣人及び呼賣人により各種の商品が特化する可能性も生じた。随つて羅馬の帝政時代に至つては請負人 *negotiator* は商人 *mercator* を意味することとなつた。固より多くの典據の解説には不確實のもの²⁴⁾の存することを免れぬが、併しさればとて事實の擴張を企てることも不可能に屬する。唯だ右の如き關係に於て探求せねばならぬのは商業組織の平均的水準でなくて云はば尖端であり、羅馬の帝政時代には既に隔地者間の商業取引が行はれたと斷定して差支ないのである。

以上古代に於ける商業組織の最高の發展段階を概観したから、進んでかゝる經營が果して如何なる程度の合理性に到達したかの問題に答へねばならぬ。而してこの問題は二つに分けることが出来る。即ち一は執行され

24) Frank, p. 345. *... should be possible in the ...*

た業務の概括は如何にして形成されたかの問題であり、二は商人の決斷の基礎とせられた計算は如何になつたかの問題である。

先づ第一問に答へんがためには古代の商業帳簿に關して更に詳かに知る所がなければならぬ。併しながら最大の經營にあつてさへ一般の經費及び船舶や建物等の償却を差引いて収益を投下資本と關聯せしめたか否かは頗る疑問視せられるところである。即ち古代にあつては簿記上の償却といふ觀念が存したと假定することは困難である。況んや複記式簿記を欠いては償却を記入すべき術も無いのである。故に古代に於て現實の収益計算が可能であつたとは到底考へられぬ。商業に於ても簿記の目的は何よりも人的管理に止まり、尙ほ幾分は信用の記録と會社利潤の分配とにあつたと謂ふべきである。

次に計算の問題に移るとこれは通信媒介の速度と市場變動との關係の問題に他ならぬ。而して既述の如く食料品の取引にあつては事態は特に複雑を極めた。價格形成の自由な場合でさへも古代全般を通じて上記のクマメネスの組織を脱却することは出来なかつた。即ち穀物に對し如何なる價格が要求せられるかは、アテミサンドリアから船の出航するに及んでさへ知られなかつたのである。

固より手工業製品、アジアの原料、チルの染色用具、シドンの玻璃、西歐の金屬、毛皮、羊毛等の場合は聊か事情を異にした。²⁵⁾これ等の場合は戦争によつて交通の杜絶せしめられぬ限り、また收穫によつて開接の影響を蒙らぬ限り、價格の變動は甚だ徐々であつた。随つてパシオンが屢々その楯の販賣によつて收め得べき價格

25) M. P. Charlesworth, Trade Routes and Commerce of the Roman Empire. Cambridge 1924. 參照

を計算したであらうといふことも考へられぬことではない。唯だ果してこれが常に可能であつたか否かは自ら別問題であると思ねばならぬ。また一般経費及び設備償却の概念が知られなかつたのであるから、果して必要な最低利潤が計算し得らるべきものであつたか否かも疑を挿む餘地があるのである。

これと同一の方向を示すものはアッチカに於ける冒險貸借の利子の大いさである。即ち商人が復航の後二割五分を利子として支拂ひ得たときは、通常の利潤は當時の状態の下では片道當り約二割であつたと見られる。併しこの程度の利潤ならば傳統的な商業組織の特徴であつたと謂つて宜い。中世に至れば利潤は屢々この程度であり、資本主義前期の大富豪の家にあつては更に少い利潤に甘んじたやうに見える。要するに希臘商人及びハンザ商人の大なる利潤は著しく危険率を包含したものと謂ふべく、一回損失を蒙つて販賣すれば次回には五割も利得するといふ風があつた。

以上の如くであるから古代の商業にあつては人々は傳統的な利潤を以て營んだに違ないし、また正確な資本収益計算は殆ど不可能であつたといふ結論に到達せざるを得ぬ。經營の合理性といふ點に關しても古代の商業は第十四世紀初頭に於けるフロレンスで到達された段階、即ち一般経費及び収益性を計算する程度に到らなかつた。而してこれこそ限り無き業務擴張や個人から解放された企業が何故に古代の文献に見當らぬかの根據を與へるものに他ならぬのである。

進んで工業に移るが、この場合にも資料としては主に紀元前四世紀頃の文献から仰ぐこととする。古代に於ける工業が専ら手工業により今日の如き機械工業を見なかつたことは改めて謂ふまでもない。唯だその手工業の中でも大規模のものは主として、奢侈品の製造に向けられたことを注意せねばならぬ。例へば武器、家具、製革品等はアテネに於て大規模な製作所で製造せられ、香料はアレキサンドリアに於て製造せられた。また伊太利及び西歐にあつても大經營は奢侈品の占めるところで、玻璃及び銅の製作に見られた。但し例外としては煉瓦工場並びに羅馬の大市場に向けて製造する部門があつた²⁶⁾けれども、これは技術上の理由及び原料の不足に基くものである。併しながらアテネに於ける經營の場合にはかかることはなく、随つて楯や寢臺の製造に右の如き理由は存在しなかつた。

さて問題はアテネの大刑務所製作場をして小規模の手工業に對し競争的ならしめたものは何かといふことである。その故は勞役奴隸の不十分な給養を姑く措き刑務所製作場の持主は奴隸に投下した資本に對して莫大な利子を取得したに違ないからである。茲に論者或は大製作場を以て、製造に於ける云はば彌縫策に過ぎぬと解し、また或は向上せる經營形態、精密な分業、改善された工具等によつて小經營よりも大なる利益が獲得されたと答へる。併しながら抑も大規模の工業の市場が主として自己の都市であつたことを顧るときは、分業によ

26) Frank, pp. 219—244.

る利益を擧げるのは稍々行過ぎた考と謂はざるを得ず。また製造の遺漏を補ふためならば小經營は果して不適當であるかを反問する餘地があるであらう。かくて問題は中世の狀態と比較することにより解明を求めることが出来る。即ち中世及び近世初頭に於ては輸出工業の場合にのみ問屋制度の形を取つて大經營が現はれた。例へばフレンチス及びフランス地方の羊毛紡績、ウルム及びオウグスブルクの綿糸紡績、ニュールンベルク及びアイヘンの金屬工業、ザールペルクの琥珀製造の如きがそれである。かゝる場合には企業者に活動範圍を與へるやうな原料調達及び販路の指揮が見られたけれども、地方的工業にあつてはかゝる指揮に對する要望は毫も現はれなかつたのである。而して輸出品の多くは奢侈品であつたから、大經營が奢侈品工業に見られたのは敢て異とするに足らぬところである。これに類推解釋を施すとせば、アテネに於ける刑務所製作場が大なる程度まで輸出のために運営されたこと、且つこの中にあつて商人の指揮の方が勞働條件の改善よりも小工業に對する競争力として大いに役立つたことは容易に論斷し得るであらう。

若し然りとせば經營指揮の方法如何の問題は益々重要とならざるを得ぬ。この場合完成品の販賣を取扱はねばならぬ限り上述の合理的指揮の可能性を顧慮する必要がある。而も工業經營そのものの指揮の問題が生ずるのである。

一例を引いて説くにデモステネスにとつては手工業經營は家計から引離された單位として存立したものではない。

ない。即ち建物、奴隸、原料、流動資本等を包括するところの獨立の事業財産の概念は彼には全然知られなかつた。寧ろ彼にあつては原料倉庫は利子を齎す財産との對立物となつてゐたのである。

これが當時一般の見解であつたとせば、収益を管理するが如きことは到底不可能であつたに違いない。蓋し投下せられた資本の大小は計算せられなかつたからである。デモステネスが製作場の収益を専ら奴隸に投下したところの資本利子として考へたやうに、彼の時代の人々は何れも同様の考を抱いた。然らざれば彼はその財産狀態を法廷に於て別様に陳述したことでもあらう。但しかゝる事情が時の經過と共に變動したことは謂ふまでもない。

然るに次に固定資本の償却といふ點が問題となる。これは古代の刑務所の形式では何よりも奴隸に投下せられた資本を意味するものである。随つて現代に於ける研究者はアテネの手工業奴隸に對して正當な償却該當物を見出さうと努めつゝある。併しこの場合は勿論古代の資料を仰ぐことが出来ぬし、また當時の學者としても償却を計慮すべき複雑な國民經濟的思考を展開することは出来なかつたのである。

これと同時に他方古代にあつては償却の計算に對する基準が與へられてゐたと考へてはならぬ。蓋し奴隸はその生活及び勞働能力が極めて不安定であつたからである。即ち奴隸は疫病に斃れ、戰爭に掠奪され、間隙さへあれば脱走を企てたのである。かくの如き情況の下にあつては如何なる償却率も見積ることは出来ぬ。況んや自由民の平均壽命さへ知られなかつたのであるから、奴隸の場合の計算の如きは全く不可能であつた。

それ故奴隸を使用した經營は凡て利益が大であつたに相違なく、奴隸使用に伴ふ缺陷はその都度速かに補はれたと見て宜い。併しながら全財産を右の如く奴隸にのみ投下することは策の得たものでないことは知られ、人々は能ふ限り危険を分散することに努めた。而も、利益は合理的に計算せられなかつたといふのが實情である。

唯ださればとて大經營が自由労働者によつて維持される可能性のあつたことを否定してはならぬ。固よりこの場合には労働者の死亡疾病の危険は製作場所有主の肩から免れたのである。同時にアテネに於ける工業には労働者の多數を誘致せぬものが少くなかつた。寧ろ餓死を免れんがために妻と働く者こそ數多く見られた。彼等は製作場内に於ける労働者の數の増加に興味を覺えなかつた。盖し工業者の地位は農民と同様で幾人の日傭人を要するかは自ら正確に知り、それ以上は假令一人増しても全く損失を招くのみであつた。²⁷⁾ また奴隸の比較的少く自由労働の低廉であつた埃及に於てはアポロニオスは娘奴隸を使つて紡績を行はしめたといはれる。何れにせよ古代に於ける問屋制度といふが如きことは嘗て知られず、尙羅馬後期の國營製作場に就て見ても限られた範圍にのみ製作したに止まる。随つて收益計算の行はれた餘地は到底見出せぬのである。

以上の如く償却計算は成就し得られなかつたのであるから、古代に於ける大經營は全く傳統を以て一貫せられ經驗を以て終結せられたもので、決して合理的に指揮されたものと謂ふことは出来ぬ。これを以て第十四世紀初頭のフロレンスに於ける經營と同一の發展段階に到達したと見るが如きは避くべきことである。

27) Glotz, pp. 267—268.

終りに金融業務に就き一言するに、この場合にも注目を索くのは二つの事情である。而してこの二つとも金融業務が依然して傳統的經驗的範圍を逸脱しなかつたことを明示するものである。

先づその一は利子の大きさである。即ち利子の大きさが法律乃至慣習によつて著しく束縛を受けてゐたことは現存の史料からして明かなところである。随つて人々は債務者の異なるにより時を同じくしながら別の利子、即ち經濟上の動機に基かぬ利子を要求した。然るに他方に於て利子の大きさは幾十年幾百年變動せぬこともあつた。何れにせよ古代に於ける資料には現代の如き資本市場の曲線は見出されぬのである。²⁸

次にその二は支拂の慣習である。即ち羅馬の貴族の内部にあつては支拂期限を嚴守する者は甚だ少かつたといはれる。これはハンザの商業にも現はれる一の特徴である。然らばかゝる慣習は羅馬の共和制後期の特殊性と見るべきか、或は寧ろ一般に古代に於ける信用制度の原始的な特徴をなすものでなかつたかを探求する必要に迫られる。唯だ茲では金融業務に於ても合理性が存在したといふことゝ反對の理由が却つて強かつた事實を指摘すれば足るのである。

四

以上の如くして吾々の到達した結論は正に消極的のものであつた。換言すれば古代經濟に於ける經營に關しては何等合理的な收益計算も資本計算も施されてゐなかつたことを見るのである。然るに始めに吾々の目標と

して掲げたことは、現代の發展が如何なる時點に於て古代の楷梯を通過したかに關してであつた。これは夙にエドワード・マイヤーが説いたところであり、²⁹⁾後には特にハーゼブレークが中世を平行關係に引入れつゝ觸れたところである。即ち商工業に關しては既述の如く第十四世紀初頭のフロレンスに於ける經營がその組織に於て古代の經營を凌駕するかに見える。併し農業に於ては漸く第十八世紀に至つて古代に見出せぬ大進歩が現はれたのである。

次に複記式簿記が合理的經營の發展の上に決定的な影響を與へたといふことは忘れてならぬところである。複記式簿記はその成立に於て伊太利のコムパニアの形成と相互に密接な關係を有するものである。然るに古代にあつてはコムパニアに類する商館は成立せず、隨つて簿記の進歩しなかつたことも異とするに足らぬであらう。

更に上來の結論と結びつけて一箇の見解が樹てられる。それは本論劈頭に指摘した通り今日は一般に合理的な指揮は「資本主義的」といふ形容語の利用に對する要求として認められてゐるが、併しかくの如きことは古代史研究者の間には從來慣用でなかつたことである。隨つて「古代に於ける資本主義」³⁰⁾といふやうな稱呼で通ずるところのことは現在の資本主義とは——假令それが最初の現象形態にせよ——根本的に異なることを知らねばならぬ。茲に名辭の變更を行ふ必要があるか否かは別問題としても、苟も研究者は通行の概念の根本的相違に注目を拂ふ必要が大いにあるのである。

29) Ed. Meyer, S. 141.

30) 例へば Salvioli, Der Kapitalismus im Altertum. Deutsch von Kautsky. Stuttgart 1912.

最後に一言附加しよう。古代及び中世の經濟史はこれを一箇の共通な體系に編述せんとし、また古代の準備工作なくしては中世の發展もあり得なかつたとすることが理解せられるならば、連續性を無視するやうな經濟史的敘述の信賴も亦自ら消滅するであらうといふことが即ち是れである。

—二五九九・一〇—